

## 編者あとがき

本書は、二〇一一年と翌一二年、「NGOと社会」の会（代表・藤岡美恵子）が法政大学国際文化学部との共催で行った三つのシンポジウムを基にしています。二〇一一年一月のシンポは、人道的介入と「保護する責任」の問題点を考えながら、外交・安保政策との一体化を深める日本の「国際協力」を問い直すというテーマで、また翌一二年六月と一〇月の二回のシンポは、「アラブの春」以降の中東・イスラーム世界の民主化のうねりをムスリムの市民社会の胎動として考えようというテーマで企画されました。後者の連続企画においてメイン・テーマとして設定したのが、ムスリム市民社会と「イスラーム的価値」との関係や、一九九〇年代半ば以降急激な伸長をとげイスラーム世界の民主化闘争の中で重要な役割を果たしてきたムスリムNGOの存在でした。

これら三つのシンポジウムのテーマに今日のパレスチナ、シリア情勢をめぐる分析を加えて編まれたのが本書です。本書の編集は、これらのシンポジウムのコーディネータ役を務めた編者が担当しました（なお、各シンポジウムの概要・資料は、新評論ウェブサイトにある「NGOと社会」のブログに掲載されています。詳細はそちらをご覧ください）。

本書が時事的情報として扱っているのは、全体的には二〇一三年秋までのものです。読者は各執筆者の所属団体や関係団体のウェブサイトにへのアクセスを通じて、アップデートされた現地情報、活動報告などに触れることができます。これらの他にも、情報は盛りだくさんです。ぜひ一度、覗いてみてください。

本書で論じられている各テーマについては、すでに数えきれないほどの文献が出版されています。対テロ戦争や人道的介入は言うに及ばず、「保護する責任」に関しても、この一〇年ほどの間に国連でしきりに議論され、日本でも徐々に論じられるようになってきています。また、シリア、アフガニスタン、パレスチナなど中東・イスラ

ム世界の個々の国、地域に関する文献も枚挙にいとまがありません。

しかし、対テロ戦争、人道的介入、「保護する責任」等を、現代の〈終わりなき戦争〉を構成する要素として位置づけ、それを現代世界の平和にとって必要不可欠な中東・イスラーム世界の平和や、日本の外交・安保政策との関連の中で「包括的」に捉えようとした点で、本書はこれまでにない新しい試みだといえるかもしれません。

もちろん本書は、まさに本書が捉えようとしている現代世界の真相の一面を切り取ったにすぎません。とりわけ、紙幅の関係で取り上げることができなかった、アフリカ大陸のイスラーム圏における〈終わりなき戦争〉の事態およびアフリカ諸国、諸地域のムスリム社会や諸民族の生活に与えているその影響については、日本ではほとんど何も知られないのが実情です。

この間、アフリカ大陸をめぐっては、中国の資源開発と覇権構築熱に対抗するかたちで「西側」の開発・投資・援助熱が昂じています。日本でも「アベノミクス」の目玉商品の一つとして産官学協同の「アフリカの開発」に莫大な税金が投入され、マスメディアを通じて盛んに喧伝されています。しかし私たちは、アフリカの平和よりも日本や大国の成長と資源確保を優先するこの「二十一世紀のアフリカの再分割」を、国家や多国籍開発企業・投資家と一緒に浮足立ち、喜ぶことはできません。実際には、アフリカの人々が潤い、絶対的貧困から脱するどころか、経済格差は広がる一方で、大規模な土地強奪と環境破壊が進み、逆にアフリカから巨大な資本（資金）が海外に流出していることが報告されているからです。本書の「統編」として、〈終わりなき戦争〉と「アフリカの平和」をめぐる批判的な分析が求められています。そこではまさに、ヨーロッパ列強（帝国）による「アフリカの分割」と植民地支配、その後の「独立」と脱植民地化の挫折といった過去の中に記されているアフリカの現在と、現在の中に映し出されているアフリカの未来を同時に捉える〈眼〉が必要になるでしょう。アフリカ大陸のイスラーム圏をフィールドとする研究者、NGO、個人の手による独創的で質の高い論考、レポートが期待されます。

### 平和を和平として考える

本書を閉じるにあたり、あえて平和を和平と同じものとして考える、このことの重要性について、ひと言だけ触

れておきたいと思います。というのも、〈終わりなき戦争〉の現代は、「平和」という言葉がそれ自体では何の実質も持ち得ない時代であるからです。本書の発刊を目前に控えた二〇一四年二月初旬のいま、眼を「国際政治」に転じてみても、この言葉がただ虚空に漂いながら消えてゆく、そんなリアリティが迫ってくるばかりです。けれども、虚しくこだまする「平和」を、「和平」という別の日本語に置き換えてみると、政治のリアリティは違った様相を示しはじめます。

「武力によらない紛争の解決」——。本書序章でも触れたように、これが国連創設のモットーであり、「戦後」日本の国是とされてきました。ところが「戦後」世界の歴史をふり返ってみると、武力による紛争の拡大が「国際政治」のリアリズムとなり、日本では国是を神棚に上げる動きが徐々にではあれ確実に進行してきたことがわかります。「武力によらない紛争の解決」とは、和平の実現のことです。平和をこの和平の実現につなげて着想し、「平和」という言葉の実質とすること。本書をふり返りながら、いま、そのことの重要性を改めて痛感しています。

私たちは、平和を和平と一体のものとして着想することに慣れていません。そのような教育を受けたこともありません。平和運動を和平運動とは呼ばないように、「平和に和平は欠かせないが、和平は平和という概念の中に含まれるもの」、つまり「平和と和平は別のもの」という考え方が一般的であり、支配的だからです。

これまで私たちは、和平といえば劇場型のパフォーマンスのみが演出される「国際政治」ばかりを連想し、一市民とは無縁な「高度な政治問題」と考えがちでした。しかし、戦争や紛争のない世界は、ときに数十年を要する和平のプロセスなしには決して到達することができません。だからあえて、平和を和平と同じものとして考えることが重要なのです。

和平とその実現を国家や武装勢力の論理からではなく、そこに生き／残っている人々やそこを追われた人々の生活の眼線から着想すること。そうすれば、互いに和平を遠ざけ合いながら、笑顔で握手を交わし続けてきた、そんな現実政治の本当の姿も見えてくるような気がします。また、これまで「通説」とされてきた「戦争と平和」の歴史や言説も、違ったふうに見え／読めてくるはずですよ。

たとえば、丸一三年目を迎えたアフガニスタン戦争の歴史も、米国をはじめとする「支援国連合」がアフガニスタンの（和平）を決して実現しようとはしてこなかった（というよりそんなことは考えもしてこなかった）歴史として見直すことができます。政治家たちは口では「和平」を語ってきた。しかしその実態は、武装解除に応じないタリバーン「急進派」の解体・殲滅戦の継続でした。「支援国連合」によって育成されてきた国軍・警察機構はその「テロとの戦い」の捨石とされ、自国の民衆を弾圧し、殺害してきたのです。停戦合意なき和平などあり得ないように、和平合意（とその履行）なき平和的権力移行もあり得ません。この真実を私たちはアフガニスタンで知りました。シリアでもまた同じことをくり返すのか？ このことがいま、「国際社会」に問われています。

六六年前に始まった「中東戦争」の歴史も同じです。もしかしたら、私たちはまだこの戦争の只中にいるのかもしれない。そう考えると、この四〇年近く語られてきた「中東和平」なるものは、もともとパレスチナ民衆の自己決定権を認める意思などまったくない、そもそもその始まりからフィクションだったという仮説さえ成り立ちます。パレスチナ出身の研究者の間では、そうした「仮説」をめぐる研究が進んでいます。日本でも「中東和平」の歴史的プロセスにより内在した分析と研究の成果がもっと広く公表されていくべきだと考えます。

さらには、安倍政権が語る「積極的平和主義」も然りです。これを「積極的和平主義」に置き換えてみると、その錯乱ぶりがより克明になってきます。日本を含む「国際政治」が世界各地の「紛争」の政治的解決を和平の実現を通じて本気で目指すなら、あえて「自衛軍」が海外で武力行使したり、米軍を含む外国の軍隊と「一体化」する必要など、まったくないからです。「積極的和平主義」は、安倍政権が掲げる、私には理解不能な「地球を俯瞰する外交」などでは実現できない、これからの日本の「外交」と「国際協力」が選択すべき鮮明な指針を指し示してくれるに違いありません。

このように平和を和平として考えることは、NGOや市民組織が平和運動に果たす役割を再考するにあたっても重要な示唆を与えてくれます。とりわけ人権・人道分野で活動する国際NGOは、和平プロセスそのものが「国際政治」のリアリズムによってズタズタにされてきた／されていることに、もっと目を注ぎ、ともすれば「自分たちの活動分野とは別の領域」と捉えがちであった「和平プロセス」への関与を積極的に検討すべきときを迎えている、

といえるかもしれません。

国家・軍・武装勢力が主要なアクターとなった「上からの和平」に対し、戦争／紛争の犠牲者の視線に立った「下からの和平」をそこに生きる人々とともに構想し、「国際社会」に働きかけること。「和平なき紛争」が人々の人権を根絶やしにし、人道的危機を生み出している（現場）を知る団体、個人であれば、これまでの日本の平和運動やNGO運動には経験と実績の乏しいこうした活動がいま、切実に求められていると実感しているに違いありません。「虐殺を止める」と称して国家に武力介入を要請する以外に、NGOや市民組織がやるべきこと／やれることは無限にあるのです。

では、「私たち」に何ができるのか？ 冒頭でも触れましたが、本書の執筆者たちが関係する団体のホームページに、ぜひアクセスしてみてください。ヒントはそこで得られる（情報）の中にきつとあるはずですから。

本書が、中東・イスラーム世界の平和に関する理解を深めるための一助となり、人と人のつながり、支援と運動のネットワークの広がり、少しでも貢献できることを願ってやみません。

最後に、本書を二〇一三年に逝去した故越田清和氏と故村井吉敬氏に捧げます。

ほっかいどうピーストレード事務局長（当時）の越田氏には「〈NGOと社会〉の会」結成のきっかけとなった『国家・社会変革・NGO——政治への視線／NGO運動はどこへ向かうべきか』（新評論、二〇〇六）や本書の前篇ともいえる『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』（新評論、二〇一一）に藤岡美恵子氏や本書編者とともに共編者として携わり、早稲田大学教員（当時）の村井氏には後者の共著者として、その巻頭論文「政官財ODAから地球市民による民際協力へ」を飾っていただきました。謹んで、両氏のご冥福をお祈りいたします。

二〇一四年二月三日 ゲアテマラの古都にて

中野憲志